

# 第七回ホスピ川柳

選考結果&選評

2025

**Meilleur Co., Ltd.**

3-9-2, Yurinokidai

Yachiyo-shi

Chiba 276-0042

Japan

## ■総評…高鶴礼子

今、この時、この瞬間の《私》が見つめているものを、この思いを、なんとかして伝えたい、というお気持ちのあふれる御作品に、今回もたくさん出逢わせていただくことができました。私は、これを書きたい、というところを、まっすぐに見つめ、記そうとして下さっている大勢の方々の《懸命》に、句の巧拙を超えたところにある《川柳》という表現手段との誠実な向き合いが感じられて、ありがたくなりませんでした。それを踏まえた上で、一つお願いがあります。雅号を付しておられる方が多いのですが、雅号をお付けになるなら、真つ当な号を、ぜひ。おふぎけの様に思われてしまう様な雅号ですと、せっかくの御句が台無しになってしまつて、もったいないです。ぜひとも、ご検討下さい。

■大賞…分かつてる 覚悟もしてる けど逝くな びっぐべいびー

■準賞…駆け抜けた 母のたすきは 受け取った 昆布

■佳作…後掲の四作品

■名優賞…後掲の六作品

# ■名優賞…ありがとう 言えぬ人にも 尽くしきる

たなか

「言えぬ人にも」の「も」が沁み来ます。《ここに描かれているひと》が向き合っておられるのは思いを口にするのできる方々のみならず、口にすることすらできなくなってしまうわれた方々でもあるのです。それは、ご両親、おつれあいといった方々であると同時に、お仕事で向き合っておられる患者さんなのかもしれません、たとえば、どんなに懸命を尽くしたとしても、今は、もう「ありがとう」という言葉を聞くことすら叶わない……、けれど、たとえば、そうであったとしても。自分は少しでも今できることを果たすのみ、ただ、それだけなんだ——と。いつかは訪れることになるであろう最期の刻限を噛みしめながら、でも、でも、を信じて大切な方々に対峙し続けておられる《ここに描かれたひと》。そのご誠実を思いました。

# ■名優賞…六度目の 最期の桜 来年も

MD

「桜」を指す措辞が「最後の」ではなく、「最期の」となっているところが、じんと迫り来ます。《ここに描かれたひと》は、今、眼前に咲いてくれている「桜」を、ああ、これが私にとっての――あるいは《大切この上ない、このひと》と見る――「最期の桜」なんだ、という思いとともに見つめておられるに違いありません。おそらくは何かしらの理由で、《ここに描かれたひと》あるいは、《ここに描かれたひと》にとっての大切な人《は余命宣告を受けられていらつしやるのかと……。万感の思いを籠めて見つめた、その「桜」――。けれど、その方々は、なんと、六年もの間、生き延びていて下さっているのです。だからこそ「ああ、来年も」なのですよね。立ち上がりくる思いの深さに、たまらなくなっていました。

## ■名優賞…失って初めて気づく 当たり前

うなぎ大好き丸

おお、まさに。全く以て、その通りなのですよね。「失う」などという事態が生じる前に気づければ、いいだけのはずなのに、なぜか、そうできない、失ってからでないと気づけない《にんげん》という存在物の在り様。「当たり前」である、ということが、どれほど、有難いことであつたのか、そんなことすらをも、その「当たり前」を「失って」からでないと気づけない――。《にんげん》という生き物が持つ、その心象。それがもたらす、どうしようもない苦境そして困惑が、そつと差し出されてあるところにハツとさせられてしまいます。「当たり前」は、そこに在って当たり前。以上でも以下でもない、という認識が、とてつもない状況を連れてくるのだ、という指弾、その秀逸さに、大きく打たれました。

# ■名優賞…薫風にあなたの気配感じ取る

南平太

一読、ドラマが立ち上がり来ます。《ここに描かれたひと》が噛みしめておられる《「あなた」なるそのひと》。そのひとが、生きておられるとも、故人であるとも、両方に読めるところが得難い語りと相成りました。いずれに読んでも、「あなた」なるその御仁は《ここに描かれたひと》にとって、無二の存在なのです。そうして。その《「あなた」なるひと》の「気配」を、《ここに描かれたそのひと》に感じさせる契機となっているのが「薫風」である、ということによって、《「あなた」なるそのひと》に対して《ここに描かれたひと》が抱き続けておられる心象が、鮮明なたちで示されることとなっていることにお気づきいただけるでしょう。この句の良さはそこにあります。切ないほどのあたたかが眼目でした。

## ■名優賞…また来てね 帰りたいとは言わぬ父

ななな

《ここに描かれたひと》のお父様は、今、おそらくは、ご自宅ではなく、老健施設の様などころで暮らしていらつしやるのだと思います。この日は、久しぶりに、ご子息あるいはご令嬢が、そんなお父様をおうちに連れて来られたのでしょうか。お父様の微笑んでおられるお顔が見える様です。けれど、時は過ぎゆき、《帰る時間》は、やって来てしまいます。ここに差し出されてあるのは、その一刻、「また来てね」と言うお子に対して、「帰りたい」とは、決しておつしやろうとはなさらない、お父様のお姿です。淡々とした語りの裡に、そつと刻まれてある、お父様のお気持ち——。それに気づいた《ここに描かれたそのひと》。が、痛いほど噛みしめておられる思いの、その切なさを噛みしめさせていただきました。



## ■名優賞…血管よ 逃げずにじっと そこにいて ナインナース

語りの立ち位置の秀逸さに、大きく頷きます。医療従事者の方々が対峙しておられる懸命を、こういうかたちで描出されたことによって、この上もなく新鮮で、得難いお味の一句となりました。なるほど、こういうことがあるのですね、と、《ここに描かれたひと》を始めとする医療関係者の方々のそのご尽力に、ただただ、感じ入ること頻りです。何と言っても、眼目は、「血管」に対して、擬人法を採って語っておられるところでしょう。それによって、《ここに描かれたひと》始め、こうした状況に立ち向かっておられる方々の、患者さんに対する《なんとかして、少しでもいいかたちで》、という、お心のアクチュアリティーが、確と立ち上がりくる言揚げとなりました。いい視座に感謝！です。この調子で、と、心から。

## ■佳作…廊下へと 洩れる嗚咽の 午前二時

とよ爺

どうか、お願い、お願いだから、何でもするから、だから、お願い、この人を連れて行かないで……と、眼前に横たわる大切なひとを見つめ、希い続けてきたその思いが、突然、断たれてしまうー。ここに描かれているのは、そんな瞬間に他なりません。何をどう、しようとしても、どれほど、懸命に願ったとしても、眼前に差し出されてある状況は、もう、何も変わることはないのです。決して認めたくない現実を、それでも受け入れるしかない《ここに描かれたひと》。その人が、大切なひとの枕辺で洩らす「嗚咽」が、しんとした静けさの裡に聴こえてくる様です。病室から「廊下」へと洩れ来るその「嗚咽」の、「午前二時」という刻限の測定が、夜通しの看病を想わせて、得難い切なさが宿り来るところが眼目でした。

# ■佳作…ありがとう　なんて言うなよ　まだ早い

やまとも

目の前に横たわっている《大切なひと》が、ふと目を開けて、突然、こんなことを呟いたのです、「ありがとう……、今まで、ありがとう」とー。それを耳にした《ここに描かれたひと》は胸が締め付けられた様になってしまつて、何言つてゐるんだ、止めてくれよ、まるで、最期のお別れの言葉みたいじゃないか、と言葉を返します。その心情——如何ともし難い愕然が、この語りなのです。お願いだから、そんなこと、言うなよ。そんな、今生の別れみたいな「ありがとう」なんて、「まだ早い」、早すぎるよ、とー。どの様な関係の二者であるのか、それは明示されていませんが、お互いにとっての《大切なひと同士》であることに間違いないでしょう。こんなにも淋しい「ありがとう」があるのだ、と、改めて感じました。

## ■佳作…私の名呼べぬ母呼ぶ何度でも

つべる

ここに描かれている「母」君は、認知症ゆえに、子であるところの「私」の名を失念してしまわれていらつしやるのでしょうか。それとも、意識混濁の状態でいらつしやるのかもしれない。前者として読むことも可能ですが、ここは後者として解した方が、何倍もの衝撃が溢れます。「お母さん、私よ、あなたの娘はここにいるよ」と、懸命に母君に呼びかける《ここに描かれたひと》。虚ろな眼差しで、あるいは、確と見つめながらも、母君は、もう、お声を出すことができないでいらつしやるのです。大事な大事な我が子が目の前にいる、目の前にいてくれる、何とかして、と思ってみても、霞逝く意識は、子の名を呼ぶことすらも許してはくれないのです。臨場感に溢れた造形から零れ落ちる母と子の真実（ほんとう）。たたただ、打たれました。

# ■佳作…親孝行 まだ途中だよ 逝かせない

スミレ

結句の「逝かせない」という言い切りに万感の思いが立ち上がります。さんざん、親不孝を重ねてきた俺が、せっかく、こうして「親孝行」のマネごとみたいなことが、やっと、しかも、ほんのちよこつと、できるようになったのに、今、逝っちゃうなんて、絶対にダメだよ、だって、「まだ途中」なんだから。逝かせないよ、絶対に、絶対に、逝かせない——と。子なる立ち位置にいる《ここに描かれたひと》の心象が、実在感たっぷりに差し出されているところにご注目を。これによつて、大いなる説得力が生まれ来ることとなりました。《ここに描かれているひと》が負っている《これまで》という刻限。ここに描かれた「逝かせない」は、それを踏まえての「逝かせない」なのです。どうか、どうか、と、心から。

# ■ 準賞… 駆け抜けた 母のたすきは 受け取った

昆布

「駆け抜ける」、「たすき」という縁語仕立ての下、「母のたすき」を「受け取る」というレトリックに託して語られる母と子の関り、そしてその在り様が、じんと、深と心に沁み来ます。「駆け抜けた」という言葉で語られる「母」なるそのひとの生き様――。何事があつても、自身を見失うことなく、しつかと独り立つて、今生を生き抜いていかれたに違いありません。そうして。その母君の《生きる》をど真ん中に据えた上で、ここからは俺が継いでゆく、と、子であるところの《ここに描かれたひと》は言うのです。修辞の的確さによつて記されることとなつた《前を向くまなざし》。その見事なまでの爽やかさに、大きな拍手を送りたくなつてしまいました。

## ■大賞…分かつてる 覚悟もしてる けど逝くな びっぐべいびー

今、まさに、逝きつつある大切なひとを前にして、悲鳴を上げる様にして揺れ動く心の在り様。それを、これほどまでにアクチュアリティーたつぷりに書き切っておられるところが秀逸です。「分かっている」のです、そうして、それゆえ、「覚悟」もしているのです。けれども――。それを、そのまま、すんなりと受け入れてしまえない何かが《ここに描かれたひと》の裡には在って、それが大きくふくらみ続けているのです。分かっているんだ、頭では理解している、だからこそその覚悟だってある。だけど、それでも――。ああ、だめだ、享け入れられない。逝かないでくれ、お願いだ、逝かないでくれ、ああ……、お願いだ、お願いだから、「逝くな」、逝ってくれるな、と――。確とにんげんがいると言い得る得難い造形でした。

# ■第一次選考通過作品

毎日が非日常だと 忘れない

消えゆく灯また灯す日を信じつつ

ありがとう三回言って逝きました

「ありがとう」なんて父さん らしくない

動けない あなたのものとに 走りゆく

あの鳥が 私とともに 空を往く

夢の中 いいじが蟬を 捕まえた

トイレ立つ父の両手のあたたかさ

昏睡の 父が微笑み 渡る川

忘却のさきにいつものその笑顔

来年も孫でいたいと泣いた夏

ごめんなさい 看護師として 謝ります

介護する その人もまた 介護され

また来るよ 外は晴天 母は雨

病氣して 弱い自分が もう一人

温もりが 父の最期の 置き土産

「大丈夫」 父に最期の 嘘をつく

言えねんだ 昭和男は 有難う

生かされて まだ逝かないで 逝かないで

あーる

蒼音

蒼い空

あおちゃん

青トウガラシ

蒼豆

赤めがね

あきら

あこ

あさ

浅井誠章

あさこ

あさのん

明日があるじゃん

明日勝

あつきー

アップダウン

しん

天音

時計より 命を見てる この現場

握る手に 落ちた涙が 光ってる

優しい嘘 ついて御免と 言わせてよ

天国で 会えるその日が いつか来る

息を継ぐ 合図を待って 夜が明ける

介護するわれより食べるわが母よ

帰りたい 出来る事なら 帰りたい

目をつむる 母にはじめて 『ありがとう』

陰になり日向になりの介護です

死にたいと沈む夕日を引き上げる

ありがとう その一言で 夜が明ける

ありがとう聞こえなくても言わせてね

「ありがとう」 そのひと言が 薬です

やつとでた 便と一緒に 涙する

お見舞いに 「さよなら」 だけは 言わないで

おはようと 今朝も言えたと 泣き笑い

世話かけて すまないなんて オレ息子

失って 初めて気づく 当たり前

わかってよ こちらも同じ 人だから

名前だけ 覚えてくれて 泣きました

あゆみ575

アルサプア

あるふおんそ

あんどうらごら

医川

石井 香久

いたすいたすけ

いっちー

いつはるひか

伊藤聖子

いぬのか

居間正三

伊予の風

岩音

いわG

ivuu

うっしやん

うなぎ大好き丸

うなちゃんまん

梅村颯



どんどんと 変わるあなたを おぼえてる

平凡に 過ごせた今日に ありがとう

通帳はあそこ言って眠る母

沈まない 太陽でいて お母さん

泣きたくて泣いてる母の背をさする

どなたさん？ それでも親はあなたです

ではまたな ここはあなたの 家なのに

六度目の 最期の桜 来年も

指先で最後に書いたありがとう

ありがとう 最後の笑顔 忘れない

壊れても 壊れかけても 母は母

振りむけば 今を忘れる お母さん

父看取る 一緒に泣いて くれたひと

何度でも 初めて出会う 母となる

声なき手 にぎるあたか 生きている

点滴の しずくに託す 生きる意志

うすれゆく 母と唄って 児に還る

祖父に似た 声に赤らむ 祖母の顔

まだ逝くなもつとさせてよ恩返し

話せない母に指切り 離さない

母さんの おかえりなさい 聞けぬまま

ウリ

えいこん

詠楽堂

江戸川散歩

えへ

えみりい

Emily

ミ

エメラルド

エメラルドグリーン

エリカ

エリリン

エリンこ

黄金肘

大林ひかる

おかまさこ

男鹿ワタル

翁シン

置楽

奥の寄道

おくら

いつまでもデカイ背中の中父でいて

ばあちゃん笑顔はいつも日本晴

ひと休み その瞬間に 急患だ

側にいる それが私の 出来る事

ありがとう 言えぬままでも 伝わって

母の背の 荷物を下ろし 父が逝く

来世でも あなたは僕の 母さんだ

大嫌い でも生きていて お父さん

今日の母今日の私で介護する

また聞いた いいえ私に また効いた

思い出も 消失するの？ 認知症

病室で 母が子になり 子が母に

そばにいる ただそばにいる 最後まで

「頑張れ」より「頑張ったね」と言われたい

暗闇や夜の廊下で母を待つ

名前より 笑顔覚えてくれていた

杖つく手 昔つないだ あなたの手

あまりにも 準備がよくて また泣ける

につこりした 今日笑顔は 何？母さん

ひと筋の なみだ無言の ありがとう

病室の空気を変える空の色

036

小島美美子

オタ少女

お茶

おっとりねこ

踊 ヘプバーン

オドントグロッサム

かあしちゃん

ガイア

怪傑もぐり33世

傀儡師

カエデ・チャーチャ

かえるし

かおり45%

柿本佐留

花京院

かくかくしかじか

家具屋のねずみ

かぐや姫

カジ

かじなみと

母逝くな どうかいさせて 子のままで

不老まで望まないから不死でいて

今日もまた癒した人に癒される

いつからか 娘の私 お母さん

ほら母さんあそこに蛍父さんだ

ありがとう 言葉なくても ありがとう

会う度に 私を忘れ 思い出す

忘れない 強い親父の あの姿

辛苦背に 最終章を 閉じし母

いかないで もう少しだけ ここにいて

昨日より ゆっくり歩く その勇氣

のべた手を払った人が泣くタペ

いるならば神よ私を身代わりに

誰だっけ そんな言葉が 突き刺さる

介護する 母に言われた 頑張るのよ

子を産んで育てて枯れて逝った母

この背中押してくれたよその背中

手を焼いた 娘を今は 困らせて

要介護 向こう三軒 両隣

嫌ですよ 夫唱婦随で 要介護

渡し賃 やらんぞ爺よ まだ逝くな

Kanu

カズマゲドン☆

風

風灯

風まかせ

かたこり

カトさ

カトラス

かばくんのかば

ガブリータ

かほこ

神丘 風

かめきち

かめんさん

加代ちゃん

カラスの行水

かりゆし

カワサン

蛙屋 柳斎

蛙屋 柳女

Kawase

母に似た人が次々入所する

車椅子 握る手の皸 じつと見る

最後まで母の手だけは離さない

あと何度桜一緒に見られるか

月が日が覗く病舎の白雲

ナースコール 呼ばれていくと 「さみしくて」

やり切つて 泣いた日今は 過ぎし日に

瓶の蓋開けることしかできぬ俺

名も知らぬ あなたの声に 救われた

この歩み 止めてなるかと 菓飲む

最期まで お世話になった 感謝です

時間くれ最後に感謝伝えたい

いつまでも 甘えたかった 最後まで

「もういい」と どうか貴方は 言わないで

手の荒れも 勲章だねと 笑い合う

しっかりと 人生の幕 見届けます

「どちらさま」ひとり息子は絶句した

先みえぬ トネルに入る 介護かな

易怒性が 母の介護で 溶けていく

一歩ずつ 頑張れじゃない 頑張ろう

覚悟して 親の手取った はずなのに

河内坊

川の流れのように

川端 日出夫

川村栄

菅恵里子

かんかんかん

完熟きのこ

菅高栄

きーちゃん

キイロイトリ

木子

北美三風

きなこ

きなこのこ

気分は上々

キューと

キヨ

ぎょうまん

霧の小町

金太郎のじいちゃん

ぐーさん

もう一度声を聴かせてここにきて

ここでなら 話せるボクの 悩み事

静けさの 中で命を 織りかえる

父追って 無上の母も また無常

100万回 言っても足りぬ ありがとう

ありがとうまだ言わないで傍に居て

旅立ちに 終わりじゃないよ 「じゃあまたね」

大丈夫 忘れられても 忘れません

便りない それが元氣と 言い聞かす

天国は 逃げないだから まだ逝くな

居てるだけ 次会う時も 生きていて

何思ふ 春風に問う 最期の日

夢で会う それが最後に なるなんて

母乗せて押す車椅子わが支え

もう居ない 母はまだいる 俺の中

握る手に 温もり残し 旅に出た・・・

独りには させない母が 一人逝く

引き出しに 仕舞い忘れた 俺の過去

諦めが 悪い親父が 俺は好き

消えそうな 吐息で紡ぐ ありがとう

補聴器の 替えの電池を 残し逝く

くうたるす

くがかん

愚月

草津亭

草取り名人

櫛

熊猫太夫

くまのこ

ぐりむろ

けい

けいちろう

ゲジなん

削鯉

月華

元氣マーちゃん

kensoua

けんちゃん

コアラ

こいちゃん

こうちゃんママ

ここあ

諦めが悪い私はまだ生きる

学んだよ 命は急に なくなると

涙より 先に手を振る 夕しぐれ

握る手が 明日を生きると 物語る

無理せずに無理をしるよと療法師

すまんなど 詫びたことなき 父ぼつり

父の背に逝きたくないと書いて冬

ダイケアの リハビリに泣く 母に泣く

支えるはず支えられてるこの現場

さよならも はじめましても 忘れない

「ありがとう」こちらこそだよ「ありがとう」

負けないで 特効薬は 君自身

なぜ言えぬ感謝のことば何故言えぬ

駆け抜けた 母のたすきは 受け取った

ありがとう だけは忘れず 逝った父

治療して 花見ができる ありがたさ

来年の桜はどこで見られるか

目を閉じた 母の頬には 子の涙

時が経ち 大事な人が 消えていく

まだ生きたい 思い出の地に また行きたい

忘れない あの日の時 あの景色

五香水貴

心笑

ココママ

コスモス

木立慈雨

ごつちよさん

琴乃夕月

coni

コバリク

こぼ

こまき

こめ

ごめんね

昆布

さいま

佐伯

佐恵子

沙緒翁

酒井一華

さかきんぐ

さくら

大変よ でもねこの手は 離さない

じつと見る 子になる母と にらめっこ

「死ぬもんか」 嘘が嫌いな 母の嘘

大丈夫 父のそばには 僕がいる

ありがとうと声に出そうと決めました

帰り用 持ち込んだ靴 履かぬまま

いつまでも 子のままだった 母の前

見守りも 立派なケアと 知る夜勤

ありがとう 笑う陽だまり 泣きそうに

お姫様 抱っこする父 軽過ぎる

「もうお帰り」明日の仕事を氣遣つて

俺のせい 摩った脛の 細さかな

初孫と 母が歩くよ 歩行器で

送られる日まででは送る日を背負う

思ひ出は あなたの笑顔 あたたかい

母は言うゆつくり終わる幸せと

夜勤明け 布団で氣付く 言い忘れ

最期だけ 約束破り 逝った父

ありがとう 心からでる そのことば

「まだ死なねえ」 笑って言うな 泣くだろが

いいんです 涙こらえて 側にいて

さくら

サクラモチ

さごじよう

佐々木

笹谷豊子

サチ

さつち

さと村

佐野美波

三郎

さんごしょう

じいじ

じいじ八年生

塩の司厨長

シオン

しかくいキャラメル

しきのみこ

しなやかーる

しばっち

洪川丸

島風

記憶にはあなたひとりが咲き誇る

死ぬ予定 なかったでしよう お義母さん

亡き妻と 今また旅の 道連れに

歩けたね 昨日の涙 今日の花

大丈夫！！ 笑顔のウラで 泣き叫ぶ

正解が わからぬままに 父看取る

中段に手をのべ母の担送車

母乗せて 押す車イス 父の杖

忘れても 毎日言うよ 大好きと

「ありがとう」よりも聞きたい「バカヤロー！」

もう充分 母は何度も 繰り返し

もう一度 生まれて来ても あなたの子

幸せな 思い出だけの 今の母

認知症 揺れる記憶に そつと触れ

我が胸に 母は生きてる 咲いている

静寂の 病室に鳴る 鳩時計

老いた手に 老いた手重ね 「ありがとう」

生かされず生きていく意志受け止める

眠ってる 病床の母 泣き笑う

忘れ物 あなたは取りに 行っただけ

ありがとうは交差する程あたたかい

島風ひゅーが

島根のぽん太

島村冬樹

ジャック

ジャンボママ

手芸人

十猪

純生

笑

章香堂

盛水

祥雪

しょうた

しょうぴ

食眠

白犬

シロー

しろくま

白髭

しん

進一郎

武骨さの 消えた骨張る 背に涙  
 会いたかった 最後になった あ電話  
 逝かないで あなたの代わり いないから  
 我が假な父よ 無言にならないで  
 まご忘れ 子を忘れても 母は母  
 年重ね 歩いた道を 忘れてく  
 その姿 いつか誰かの 夢となる  
 さよならと 手を振る父に またねでしょ  
 本当に 生きててくれて ありがとう  
 親孝行 まだ途中だよ 逝かせない  
 見て雪が 点滴の腕 窓を指す  
 生きるんだ 生きるんだって 目が叫ぶ  
 この介護 わが行く先の 先達者  
 「スマナイ」と 言われ「ゴメン」が 言えなくて  
 白衣の背 ひと息深く 力込め  
 感謝しかない病床に手を合わす  
 ありがとう その一言で 背が伸びる  
 ありがとう 噛み締めながら 次の部屋  
 一匙ずつ阿吽の呼吸父と母  
 躊躇わず言えばよかった大好きと  
 逝く妻へ 悲しみ超えた ありがとう

新月うさぎ  
 シン・ゴジラ  
 新屋洋子  
 翠夏  
 末っ子  
 洲鎌優美  
 スズ  
 すずめ  
 SUE  
 スミレ  
 すみれ  
 セイ  
 井蛙  
 誠晏  
 関太郎山  
 せきぼー  
 ぜろ  
 仙骨隆々  
 千里同風  
 續々  
 そんちく

この絆切れない記憶途切れても  
 車いす 小さくなった 親父の背  
 無事暮れた 感謝でそっと 見る寝顔  
 直葬でいいよと云って母は笑む  
 その話聞くよ二度でも三度でも  
 忘れないわたしが生きている限り  
 一瞬で 元氣になれる ありがとう  
 おめでとう! ばかりではない 退院日  
 「忘れてもいいよ」の笑顔忘れない  
 ありがとう 言えぬ人にも 尽くしきる  
 そばにいる 産まれるときも 逝くときも  
 あなただけ人間扱いしてくれた  
 まだ生きたい 孫の笑顔に そう願う  
 寝たきりの子より長生き誓う日々  
 ありがとう 言われることに ありがとう  
 囲まれて父の最期の握手会  
 お母さんお願いだから頑張って  
 白衣脱ぎ 涙ぬぐって 帰る道  
 私には 見せぬ笑顔の 母がいる  
 俺のこと わからなくても ありがとう  
 喜寿米寿 天寿来るまで あなたの子

たあに  
 橙色の満月  
 太陽とそ風  
 沢庵  
 拓ちゃん  
 竹とんぼ  
 たこすけ  
 たつくり  
 立田溪  
 たなか  
 田中時風  
 田乃無骨  
 たび  
 たまさもち  
 魂  
 たまのいわし  
 たむぞう  
 たろう  
 団くるみ  
 ダンディムラムラ  
 蒲公英

「おはよう」の父母（ちちはは）の声思う朝  
名を忘れ 子まで忘れた 母がいる

「ありがとう」 今日は何度も 言えました

寝る祖父のシロツメクサも摘めぬ指

違ふ名を 呼ぶ父のそば 寄り添って

最期まで父は昭和の人でした

看取ること 寂しい辛い 代わりた

話したいまだ伝えたいこれからを

いつからか 介護日誌が 恋文に

その傷が あなたの道を 伝えてる

亡骸を 抜け殻と言う おばあちゃん

生きている それすら悔やむ 身の不自由

私の名呼べぬ母呼ぶ何度でも

痛いのは どこより財布 身にしみる

命とは 問い続けてる この場所

孫あやし 遊んだ母が あやされて

車椅子 初めて乗った 父の顔

「何事も 急ぐな」言うて 何故急ぐ

あらどなた 子だと言えずに 手を握る

鍵かかる 病棟残し 母ごめん

母の手をさする不孝を詫びながら

ちうう

ちかちゃん

チセ

千船早帆

ちゃこび

ちゃったマンガー

ちやりんど

忠一

ちゆんすけ

ツキ

都冬夢

つばめ

つべる

ツルボン

テオジル

デシ

でじゃぶー

てちにゃん

デッサン

デニム

手まり

血圧と 悩みをそつと 測る朝

握った手握り返してありがとう

贖罪を 済ませて兄は 旅立った

窓の外見る横顔に父がいる

介護される 身にもあるぞよ 介護疲れ

その時が きてもあなたが いてくれる

この施設 いいねと母は 涙して

聴こえずとも何度でも呼ぶ「おじいちゃん、」

忘れても いいよ私が 忘れない

見送って 結ぶ最後の 親孝行

言わないで「幸せだった」まだはやい

車椅子 乗って花見を 来年も

また明日 言ってくれるか 君の笑み

過去は過去 いいのそれでも する介護

また明日 言える幸せ 帰り道

泣くな俺母の自慢の息子だろう

廊下へと 洩れる嗚咽の 午前二時

孝行は不安な顔を見せぬこと

血管よ 逃げずにじつと そこにいて

父のいた ベッドの角度 戻せずに

命とは 問いかけながら 手を握る

てんちゃん

土居耿

都井の風

糖質無制限

豆風

桃李

棟六

とかげのしつぽ

朱鷺

道産子

とし

となみ

とも

ともきつず

ともさん

とも蔵

とよ爺

どらまにあ

ナインナース

なおきん

なかむら

夜勤明け 疲れた顔に 咲く笑顔

静かなる ガンコ親父の オムツ替え

祖母座椅子道行く人をただ見てた

ごめんねと言わせてばっかりでごめん

ありがとう 届かぬままに また一日

買えませんか健康という財産を

母の声母の手母を思い出す

また来てね 帰りたいとは 言わぬ父

素っ気ない『ありがとう』でも『ありがたい』

ありがとう その一言が 明日の糧

生きる意味 あなたの笑顔 守りたい

薫風にあなたの気配感じ取る

ひっきりなし 昼夜を問わず 鳴る電話

大部屋の 夜半の遠慮の 咳ひとつ

諦めじゃ ないぞ！覚悟だ！ いざ病！

会いにゆく 孫に娘になりながら

忘れない 現場に感謝 あの世界でも

生きつくしなお生きつくし眠る母

臨終に零れ落ちてくありがとう

点滴を引きずりながら花見道

手と手と手 独りじゃないよ 僕もいる

なかる

鳴き砂

なし

夏島有

夏蜜柑

奈菓子

七瀬 棕

ななな

なみや

なゆた

なるち

南平太

和心

西大路湖山人

ぬえ

温水ふみ

猫ザウルス

ねこ77

ねこまき

猫柳

のぐろつけん

来ていない娘が来たとはしやぐ父

「いたい」より 「会いたい」と父 子に伝え

何をすれば 覆水盆に返るのか

泣きながら 笑顔つくった 夜勤明け

夜勤明け シャワーで気付く 伝えなきや

父さんの駄洒落も一度聞きたいな

骨細る 母の髪梳く 春の風

笑って欲しくて私笑ってる

痛くても 父は笑顔を 絶やさない

背を撫でる背負ってくれた人の背を

親指に残る温もり 母の脈

肺の壁痛さ伝わる息の音

力なく 握る手の荒れ 母の生

病床の父案じつつ葱は伸び

立ち上がる勇気のそばにいつもいる

なあオヤジもう頑張らなくていいんだよ

冥途行く待合室は混んでいた

生きたいと 願う心が 生命線

さよならは 言わない今日も また明日

先生の その一言で 救われる

他愛ない会話心が泣いている

ノソノソ

のりのり

はかま

白衣の戦士

はしやぐ年子の心

ぱせり

ハチ

初貝みな

はっちおーじ

花一匁

はなはな

羽馬愚朗

ばぼりん

浜ぶどう

羽茂祐子

隼人

原田和夫

遙

はるちゃん

はるはる

はるひさ

もういいよ ゆっくりしてよ 休んでよ

笑みながら 母は置いてく 涙の子

その時が 今だと知って ただ縋る

共倒れデイスービスに救われる

笑ってる 泣くな泣くなと 父の声

はじめからやさしい声の人でした

ああ泣けない 泣けなかったと 嘆きたい

丸くなる父の姿に襟正す

縛られどなおも探して あの時を

しゃべれない あなたの気持ち 届いてる

吸飲みや役目を終えて息をつく

分かっている 覚悟もしてる けど逝くな

欲つされて ほっとした顔 ほっとする

毎日が 母と私の 最初の日

母の背を さすって戻る 幼き日

言うてきや! 愚痴も辛さも 楽しさも

夏祭り花火見つめるガラス越し

世話をする 私に母が 世話を焼く

思い出を いっぱい備蓄 放さない

車椅子の母が見上げる初桜

最期まで痛いと言わぬ父でした

はるま

はるやす

ハルル

万愚節

ばんぶー

ばんぶりん

畢

ピーコック

びいな

氷川葱味噌

翡翠

びつぐべいびー

日付日和

ひでじい

ひでぼん

日々平和

一二三文

風信子

ブリケン真

ヒロ

ひろP

「まだ大丈夫」 強がる父の 手が震え

緊急は想定外の顔認証

辛くても 泣かない母の 嬉し泣き

何度でも あなたがくれた 名を教え

死んでも死なん!と約束したじゃない

あまのじやく 逝つていいよと 言っていない

メモの裏 そつと書かれた 「ありがとう」

「元氣だよ」 消灯前の電話口

番号で呼ばれて我と気がつかず

神に乞う! 逝かすな母を まだ早い

母背負い 肩に雫の わすれもの

泣かないと 決めて隠れて 涙する

ボクの為怒鳴って泣いてくれた父

手を握り 時よ止まれと 念じた日

ありがとう 守ってくれた 大きな手

逝く日まで 頑固な父を 演じ切る

「死んだんか?」 目覚める父に 「生きてるよ」

生きざまがその逝きざまが道しるべ

同室の患者同士の同志感

手は貸した 立てるか母よ 足を出せ

天国で親父が叫ぶまだ来るな

枇杷

びわしゅ

ファンタ爺

ぶー

プーちゃん

深澤 健聖

不屈の屈葬

ふくろう悠々

ふけ老人

ふじちゃん

不詳の息子

ブラックココ

ふわふわ

文案堂

分水のさくら

蛇のとぐろ

べるちゃん

歌井ぼうかる

ホープマン

北房あさぎ

ポコあペコ



どの神も 人を殺せと 説いてない

足腰の分まで口は良く動く

車いす母と思いい乗せて押す

母を看取り家を見取りて父冥す

名も顔も 忘れられても 父は父

ありがとう拙い文字に涙する

苦しみを隠す優しさ君らしさ

この人の命預かる介護人

逝かないで 唯一無二の お母さん

一番の 特効薬は その笑顔

もう泣くな俺の余命も半分こ

抱かれた母を抱えて車椅子

孫と呼ぶ その子は君の 子供です

看護され 看護しようと 決意する

この皺がぼくを育ててきた証

サヨウナラそしてあなたへアリガトウ

謝るな 心配するな 気にするな

母が逝き 逝かぬと言った 父逝った

満開に母を誘って車椅子

真夜中に 帰宅願望 私もです

子が見えぬ母の瞳に子は映る

星新

ぽっくん

ほのぼの

ぼわろ

まーきん

真壁真治

まさみ

マジかよてっちゃん

松庵

松依花奈

マッサン

まつさん

マッシー

松田少納言

松村波光

まつもともとこ

真夏日

招き猫ひーちゃん

豆の蔓

迷い猫

茉莉亜まり

告知された あなたの明日を 手伝おう

年令をへもうとへまだとで 使い分け

ありがとう 何度言っても まだ足りぬ

母さんを 宜しく頼む 逝くな父

聞けたなら 父の小言を もう一度

あんだだれ 今日が始まる 自己紹介

俺は父 父は俺なの おばあちゃん

先生に 話す練習 昨夜から

できぬこと カルテに書けず 抱きしめる

待ちわびた 退院の日に 友の顔

命継ぐ たった1錠 託された

まだ呼ぶなやりたい事が山と有る

「ありがとう」それは私のセリフでしょ

忘れない 私の母は あなただけ

見届ける 生き切る母の ラストラン

母が逝く私に笑い皺遺し

握る手に 脈と願いの 鼓動聞く

そばにいる それがわたしの できること

失声の 私の想い さあ届け

忘れてもそばにいるから生きていて

鳴咽から 溢れ出てくる ありがとう

麻呂

万年幹事

みかん

みかん

美柑

みこちゃん

ミサキラブ

みずいろてがみ

ミナ

三清

三編

みっちゃん

ミナト

みなまる

ミニトマト

ミファ

みやこ

宮のふみ

みやび

深雪

みゆきち

記念日を 避けて優しい 母が逝く

この時を集う命が生きている

できないが できるに変わる 喜びよ

恩返し 私は何が できるのか

ドアが開く そこに貴方が いて欲しい

不安でも なんとかなると 信じてる

寄り添ってただ寄り添って側にいる

またあした そんなあしたが くればいい

「ありがとう」は わたしがママに 言う言葉

父よ待て どうか着くまで 逝かないで

病室に 差し込む光 生きる意味

てふてふに乗れたか母よ「また明日」

言わないで 遺影になんて まだ早い

抱きしめる 母の着替えに ある温み

生き地獄 生きてほしいと 願う夜

亡き父の 最後の言葉 母頼む

腰曲がり首曲がつてもへそ曲げず

ひたすらに 生きた親父の 太い文字

四季巡り死期迫り来る日々を抱く

ありがとう もつと言わせて ありがとう

言い聞かす 慣れに慣れるな 我が看護

みらいむ

みれまま

みわ

みん

みんとと

みんみん

ムギ

無色

ムレチコ

盟主クサイ

めーぷる

めめんと森

めろん茶

木星

もち代ママ

もっちゃん

物見遊山

桃太郎

桃乃茶

モモンガ

もゆあ

おんぶした 母は軽くて あたたかい

母ちゃんよ ライスカレーを もう一度

祈るのみ 生きる灯火 明ける夜

母がしてくれた通りに母を抱く

謝辞を云う 母の最期に 見た涙

トイレまで今日もふたりの旅をする

何度でも 父の子として 生まれたい

お母さん 窓の桜が 呼んでるよ!

誰がやるもう動いてる手と手と手

また来るね 祖父と交わした もうこぬ日

点滴の リズム重ねる 母の息

ありがとう なんて言うなよ まだ早い

父と母 初めて見せた 涙顔

幾度でも 笑顔で聞くよ その話

一匙に こもる優しさ かみしめる

親父さあ 笑い過ぎだよ 遺影写真

「ありがとう」いや、こちらこそ ありがとう

三途の川行くな渡るな舞い戻れ

助からぬ 悟って尚も 尽くす人

忘れない母の最期の深呼吸

あと一匙食べて食べてと目が痒む

もりのひと

モンテカルロ

やーくん

八木 五十八

安田蝸牛

箭田儀一

やっち

八十日目

やぶさめ。

やましよう

やまにとろ

やまとも

やまとゆう

やまびこ

やまびと

山法師

ゆう

ゆう

由羽

夕風

郵呆

笑つてよ 独りじゃないよ 俺が居る

おはようと 明日また言える それだけで

帰ります いたい何処へ ここは家

小さな手、生まれてくれて、ありがとう

忘れない あなたがここに 生きたこと

握手した次の朝にはもういない

寄り添つて くれる優しさ 特効薬

笑い合う友又一人先に行き

星になど ならなくていい 逝かないで

「あんた誰？」と言われるけれど母は母

ありがとう当たり前ではない介護

忘れても 何度も言うよ 私の名

ひとしづく こぼす弱さも 抱きしめる

できたこと 数え治して 春を待つ

人体を 創りしものよ 図面くれ

無くせない 記憶を糧に 今生きる

もう少し 喧嘩したいよ 時止まれ

天寿まで生きたと言えるがん連れて

あつたかい 子の手に引かれ 散歩道

耳遠い母に心を近づける

「帰りたい」 その言葉胸 締め付ける

ゆうゆう

ゆーらら

ゆかり

雪男

ゆまち

夢糸

ユメ吉

夢希望

夢子

夢恋士

夢まくら

ゆゆか

ゆゆゆ

ゆりたろ

ようよう

柳留人

横ちゃん

吉田 天

淀太郎

よもぎ春子

ラーテル

息の音深夜病棟朝を待つ

見送る父もう会えないと分かつてた？

髪は抜け されども君は 変わらない

時は金 いいえ命だ 離れない

笑うこと それはみんなを救うこと

まだいえぬ みとめたくない さようなら

話したい 離したくない 君のこと

始まりも 終わりの類の ひとしづく

父に詫び母にも詫びる父の通夜

後悔の ない介護など ないこの世

そばにいる事しかできぬされどいる

人生(たび)の最期 看させてくれて ありがとう

手を引かれ 通った道を 手を引いて

母であり同志であつて母だった

引いた手が 母の苦勞を 語りだす

百歳の母がほほえむ 春の夢

生と死の 狭間戦う 戦士たち

病床で 母の靴音 父が待つ

日記帳 かすれた文字の 「ありがとう」

「もう」と「まだ」くりかえすだけ「もう」と「まだ」

ラッパさん

ラン

立心琴葉

龍神

りらこ

リン

リン

りんす

ルーキー

ルーク

瑠珂

ルカママ

るるねこ

ルルル

老人生

ろくすけ

わいわい

わい

和香

わらび

わんこなり



## CO1 (シーオーワン) ソニック電動歯ブラシ

奥歯の裏側まで心地よく磨ける

4時間充電で20日以上使える

抗菌設計・完全防水

31000ブラシストローク/分